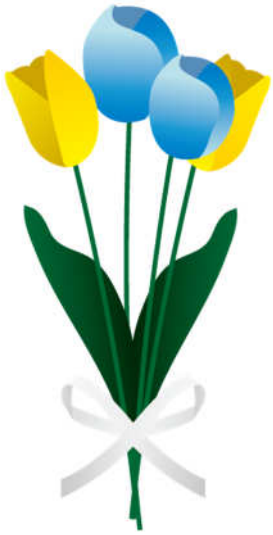
思春期世代と向き合うすべての人へ

いわて塾 2013　報告

思春期の問題について、若者はどう向き合っているのか
専門家はどう考えているか
一堂に会して、今後のヒントを得る、そんな塾にしたい。
大人も若者も様々な気づきが得られました。活動報告書を作成しました。
皆様のご参考になれば幸いです。

平成 25 年 8 月 10 日（土）～11 日（日）

会場：岩手県盛岡市　鶯宿温泉　赤い風車



なお、本事業は、いきいき岩手支援財団　いわて子ども希望基金の助成を受けて行われました

事業の目的

(1) 目的

思春期保健に関わる若者とベテラン講師陣が、年代を越えて交流・議論することにより、めまぐるしく変わる社会環境や最新のアプローチ手法などの情報を共有し、今後の思春期保健対策をになう人材(ベテラン及び若者)を育成することを目的とする。

(2) 現状

最近の青少年を取り巻く環境においては、スマホの利用によるゲームサイトなどの急速な普及、また、リア充・非リア充といった教室内カーストの発生など、いわゆる大人の現状認識がついていけない状況にある。また、若者側においても大人とじっくりと交流する機会はほとんど無く、相互の考え方、感じ方の違いがわからないままに相対している。

(3) 課題

思春期保健に携わる大人が、青少年の現状についての認識が不十分であり、サイト等に起因する問題に対し、適切で迅速な対応が難しい。必要性

青少年に近い若者の最新の情報やベテラン講師陣が持つ専門的な知識・手法などを、年代を越えて共有し、新たな思春期保健対策の方策を探る必要がある。

(4) 必要性

青少年に近い若者の最新の情報やベテラン講師陣が持つ専門的な知識・手法などを、年代を越えて共有し、新たな思春期保健対策の方策を探る必要がある。短時間で濃厚なディスカッションを行い、最大限の効果を得るため、合宿研修の形を計画する。

開催日程　詳細は別添付　プログラム参照

【1 日目】

・講演　①　2hr「思春期の性」

講師:岩室　紳也　氏(公社)ヘルスプロモーション研究センター　センター長

・トークセッション　①　2hr　講師と若者のディスカッション

「神に問う！～何でも答えていただきます～」

「青少年をとりまく環境　草食化？リアルはきらい？」

・トークセッション　②　2hr　参加者すべてのディスカッション

「大人と若者と子ども達　そのギャップとは？」

【2 日目】

・講演　②　2hr「今の子ども達の悩みって、、？」

講師:上村　茂仁　氏　ウィメンズクリニック・かみむら院長

・トークセッション　③　2hr　参加者すべてのディスカッション

「年代を越えて　私たちがなすべきことは？」

事業実績

参加人数:一般 14 名、学生　18 名　合計　32 名(うち　25 名宿泊)

内容:別添付プログラムを参照

① 岩室伸也　氏「思春期の男子は何を抱えているか」

パワーポイントを用いての講演。初交経験率、HIV感染・AIDS患者数、人工妊娠中絶率、児童虐待数等、種々のデータや自身の経験に基づき、現代の男子に起きている問題や現象について解説。最近の理解に苦しむ事件の多発について述べ、その根本的な部分に関与する共通課題として「関係性の喪失」をあげた。最優先されるべきは「関係性の再構築」急がれるのは「コミュニケーション能力の開発」であり、これからの健康づくりとして、I（Information）E（Education）C（Communication）という考え方が提示された。さらに、雄雌の違いを知ったうえで、（特に男子の）ストレスに耐えうる力を育てる必要性について触れられた。

総じて、かかわり・つながり・支え合う「環境・居場所づくり」が重要であることが話された。

11/23 陸前高田においてAIDSフォーラムが開催されるとの紹介もあり。

② トークセッション

講師の岩室氏、上村氏、世話人秋元先生と参加者のフリートークセッション。司会進行は世話人（いわて思春期研究会副会長）佐藤卓氏。岩室氏の講演を受けての感想、疑問や普段自分が感じていること等が挙げられた。

・若い女性のひきこもりや自殺者が増えている。
・性教育は手段であり目的ではない。日々の活動において目的と手段を意識しながら、まずは自分の周りから行動していくことが重要。
・ピアを実施する際には、誰もが自分の言葉で行うことが大切。スローガンを全部削っていくことで得られる「本当に伝えたいこと」が重要。
・DV をした、受けた、という経験の無い人はいない。デートDVの加害者被害者は誰でもなりうる。その経験を忘れないで相対することができるかどうかが大切である。
・男の子に対して、壁にぶつかってどうにもできない子どもが増えていることに対して、友達と話をして良いということを教えること、誰にも相談できなければ、本、マンガを読むことを伝える。
・男の気質について、社会的プレッシャーが男にかからなくなっているが、弱さが目立ってきた。
・コンプレックスは社会的につくられたもの。（例：包茎。‘包茎’でインターネット検索してみると相当数の件数がヒットする。実際包茎は手術しなくても大丈夫なもの。＝包茎の悩みは作られたコンプレックスである）
・男の子の相談は少ない傾向であり、その理由としてプライドが傷つく、言い馴れてい

ない等が挙げられる。草食系に逃げている。
・自分の意見があってもそれを出せない、空気を読みすぎることがあることに対しては、言ってもいいよと子どもたちに教えなければならない。子どもたちは、意見を言ってもいいといった経験をしていない。
・空気を読み「KY」を気にする子供は 8 割。同じ考えでないと不安な子供は 7 割。「ともだち地獄」によると、現代の子どもは横のつながりを大事にする世代であり、目立ってしまうことを恐れている。これは、部活に入っていない子が増えている、気の合う人だけと過ごしているといった現代の傾向もふまえると、家庭だけの問題ではない。

③夕食後、深夜までフリーディスカッションが熱く語られた。

深夜まで語り合っても翌日朝のラジオ体操から元気に開始

④上村茂仁　氏「メール相談から見えてきたこと」

パワーポイントを用いての講演。上村氏は普段から思春期世代の子供たちから1日100 件を超すメール相談受け付けており、相談件数は時期によって特徴があることについて紹介された。最近の傾向としては、LINEによる相談にて、既読無視を気にする子供たちが増えているとのことであった。性被害を報告してきた子供たちの年齢は16歳から上がるが、8～9歳からの性被害者も少なくないという現実を提示された。

性に関して相談したい相手としては、友人・携帯・ネットが挙げられ、理由の一つとしては、大人は怒るものだと思われているとの説明。

デートDVに関して、普通の恋愛からDVが起こっていることから、DV防止教育は普通の恋愛から行うことが重要。また、「約束」はデートDV最大の暴力であること、怖いという気持ちはDVであることについても話がされた。

デートDV防止のために支援者の姿として求められるものとしては、‘気づく、聴く、よりそう、大人につなぐ、一人一人をみる視点をもってほしい’とのコメントがなされた。

トークセッション②

講師の上村氏、岩室氏、世話人秋元先生と参加者のフリートークセッション。司会

進行は世話人佐藤卓さん。上村氏の講演を受けての感想、疑問や普段自分が感じていること等が挙げられた。

・ジェンダー教育は難しいが、例として月経教育する上で関係性教えていく等で行っている。
・臭いものには蓋をするのではなく、必ず経験するもの、としてカリキュラムに取り入れる。
・大人が子ども達に対し、つらさ、もどかしさを伝えていない現状がある。
・自分の言葉で、少しずつ普段から伝えていくことが大切。
・子ども達が大人には言えないのであれば、子どもを取り巻く周りの誰でも語っていくことが大切。
・女の子は、女の子のコミュニティで相談するが、男の子はプライドの生き物なので周りに発信することが恥ずかしい。この部分が心配。
・男の子はどんどん困難にぶつかっていくべき。母親に「愛おしい」と思われて二人で暮らしたら大変。困難に弱い特性は、インターネットやラインだけのせいではない。
・友達には言えない悩みもあるので、生徒にとって養護教諭は特別な存在である。
・学校における性教育は割り当てられた時間で行っている。限られた時間しかないの

で、知識を「知っている」「知っていない」では違う。親も大変なので連携が大事。
・デートDV予防のために、友達どうしで教えあうことが大事。
・中学生で「付き合う」子ども達がいる中、中学校の教科書にデートDVについての記載はない。
・　大事なこととして、親子、友達、恋愛といった関係性の教育と居場所が必要。

今回の事業効果
別添付　参加者からのアンケート結果 1、2 参照
フリータイムトークにおいては、講師を中心に若者、大人が車座になって座り込み、垣根のないすぐ隣でお互い話をし合うという他ではあり得ない環境を作成。日頃の想い、疑問、意見を交換し合い、うなずきあい、理解を深めることが可能であった。教育方法として一方的知識の伝達になる講演方式はある程度の効果があるとしても、最終的に「自分の言葉で実感する」ことが最もその効果が高いことはすでに実証されており、著名な講師と「同じ時間を共有し、とことん話し合う経験」が若者たちへの高い教育効果を期待させるには十分であった。また、大人側もほとんど話をすることのない世代と存分に意見を出し合うことができる時間は非常に貴重なもので、思春期世代に対しての取り組んでいるそれぞれの専門性に更に今の若者の考え方、感じ方を加えることができたことは、今後のさらなる発展を記することができた。

最後に
一般的講演、ディスカッション方式ではなく、あえて宿泊研修形式とした効果を最大限得ることができたと考えている。参加者、周囲からの評価も非常に高く、毎年実施していただきたいという要望を多数いただいており、「いわて塾」として継続して参りたい。

あとがき
関係者の皆様、本当にありがとうございました。是非、継続したイベントとして次世代の若者との交流を深めて参りましょう。
いわて塾 2013 世話人
高安愛実・佐藤奈津子・佐藤佳子・奥寺三枝子・佐藤　卓・秋元義弘